

秀 賞



私の挑戦

秋田県横手市立増田中学校

二年 竹内彩芭

私は「挑戦」することとは弱者が強者に挑み、勝利を収める、まさに戦国時代の下剋上のような戦いだと思う。

私は小学一年の頃から一輪車クラブに所属し、日々演技や技の練習をしている。初めて一輪車に乗った四歳から数えるともう十年目に入る。思えば常に挑戦の連続である。チーム内で大会のメンバーに選ばれるために自分の武器となる技を磨きアピールする。チーム内、春夏秋冬の陣である。片足で乗れるようになって喜んでいた小さい頃が懐かしく思える。あの頃は演技中に落ちようが転がるのが笑顔でさえいけば「かわいい」と賛辞をもらえたのだ。

メンバー発表後は、大会本選への出場枠をかけて予選に臨むことになる。予選はビデオ審査という方法で行われ、ミスをしたものは提出しないため、いわゆるノーマスである最高の一本を目指す。朝から晩までビデオを撮り続けるビデオ撮りの乱だ。これが肉体的にも精神的にも追い詰められるのだ。ベストな演技、またはベターな演技完成終了間際に自分がミスをした時には「ごめんなさい」の音が震える。もちろん責めるメンバーはいないのだが、落胆ムードを感じた時は身の置きどころがなくなる。この予

選に通過すると、いよいよ本選へ臨む。その前に演技順を決定したプログラムが発表される。これは審査評価の低い順に並べられる。

昨年入賞した私たちのチームは今年シード権を獲得し、最後から二番目という絶好の位置につく。嬉しさの反面、期待値の高さを想像すると吐きそうになる。本番へ向けた演技構成と練習を繰り返し、本番に臨む。

七月十四日、群馬県高崎アリーナに入る。グループ演技では中学生も二十歳も三十歳も同じクラスで戦うことになる。レースやスパンコール、スワロフスキーのきらめくドレスという名の鎧で完全武装した選手たちが集結する様子は、言いようのない高揚感を私に与えてくれる。演技前の緊張や恐怖はもちろもあるのだが、新しい技や目を引く演技を見せてくれる選手たちへの期待値も同様に高い。目にするさらびやかな衣装の下に隠された無数の傷と涙の数ほどの選手も同じだと思ふからだ。

いざ本戦。曲が流れる。無心に、練習は裏切らないのだから自分に自信を持つて、と思うは易し、行うは難しだ。練習で成功率がイマイチな技やタイミングがずれたら落車してしまう技は演技直前にやろうかやるまいかと葛藤が始まる。チャレンジして落車するくらいならやらずに無難にまとめた方がよいのではないかというささやきが頭の中をかすめ、やがて支配する。決して成功率が低いわけではなかったが、技の一つで私は落車する。「ノーマスの演技」をめざしていたのに落車してしまい、頭の中が真っ白になった。泣き出したい衝動に駆られるが演技はまだまだ続く。気持ちを切りかえるしかない、私はまだ数分ある演目を全力で踊る。

結果は三位。メンバーの入れ変わりが少なければ来年のシード権を獲得した。首にかけられる銅メダ

ルの色は、安堵の気持ちと完璧な演技ができていた順位はどうだったのかという複雑な気持ちを映した。勝負に「たれば」なんてないことは痛いほど分かってはいるのだが。数日後、大会の写真が閲覧可能になった。カメラマンの方が撮ってくださいるので動きがあるにもかかわらず非常に細部まで撮れている。その中に私が落車する寸前の連写された写真があった。私は、その時、一輪車のフォークに立ちビールマンポジションにあった。それを支えて引く張つてくれていたチームメイトの姿が私を落車させまいと必死だった。腕を握る強さ、表情、その全てが物語っていた。落車寸前の葬りたい写真が、とても思い出深い一枚となった。これは自分一人の戦いではない。同じ方向を見据えてともに進んでいけるチームメイトがいるということを確認できたのだから。どんな言葉よりも重い一枚だった。

思い返すと、初めて乗った四歳の頃から、一輪車がここまで私を引き込むものになるとは思わなかった。先輩たちの見事な演技に憧れ、その背中を追いつづけた十年だった。

また、次の大会へ向けての練習が始まった。全国の舞台でもう二度と踊ることのない大好きだった「雷」という演目。それを過去のものにして、優勝旗を持ち帰るその日まで私の挑戦は終わらない。